

---

# From**ミカ**

涼風 玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fromミカ

### 【Nコード】

N2576R

### 【作者名】

涼風 玲

### 【あらすじ】

人生初の彼氏・藍川京汰が殺されてから一年半。美香は、悲しい記憶を抱えたまま、至って順風満帆な人生を送っていた。けれどそんな彼女の携帯には、京汰からの最後のメールが残っている。何故ならそこには、彼を殺した張本人への手がかりが、残されているから……

## 序

「美香、ごめんな。こんな事に巻き込まれて、ホントにごめん。あと一週間で、お前の誕生日だったのに・・・一緒にいられないかも知れない。許してくれ」

彼からの優しくて哀しい懺悔の言葉。

今も、液晶画面だけでなく自分の心に焼き付いている。

「お前の誕生日プレゼント、買いに来たんだ。お前、可愛いネックレス欲しいって言ってただろ？ 小さくてもジュエルが付いてるのが良いって・・・それで、こんな所に来ちゃったんだ」

自分を想っての行動で、彼がこんな目に遭うなんて。考えもしなかった。

それでも彼からの言葉に責める響きはなくて、余計に泣きたくなる。

「なあ美香。俺・・・今日久しぶりに、海堂に会ったんだ。何年ぶりだろうな？」

最後に、どうでも良い様な内容を残して。

彼からの最後の文章は、こうして途切れている。

それでも、彼から直接聞いた最後の言葉は、自分にとって何よりもかけがえのない、大切なもの。

「好きだよ、美香。世界で一番、お前を愛してる」

いつも齒の浮く様な台詞を簡単に言う彼だったけれど、この言葉だけはどうしても免疫が付かなくて。

真っ赤になる自分の頬を見て、彼は無邪気に笑ったものだった。

一年半前に送られてきたメールの送り主は、「藍川京汰」。

自分の初めてのカレシ。

彼からのメールは、もう二度と送られる事はない。

## Diary 1・悪魔と再会した日【上】

とある繁華街を、一人の女性が歩いて行く。

肩より少し長い位の髪は、暗い茶色に染められ、軽くパーマがかけられている。色は白い方で、顔立ちは物凄い美人という訳ではないが、それなりに整った方。

すらりと背が高く、脚が長い。モデル体型の一步手前、一般人としては上々なスタイルを持つ彼女は、見た目から二十歳前後の妙齡の女性と判る。

彼女は、国立の理系大学の四年生。院への進学も問題ないとされ、友人関係も良好、親との争いも殆どなく、本当に順風満帆な人生を過ごしてきた。

一年半前に、恋人を喪った事以外は。

彼女の名前は美香。キヤマ ミカ 木山美香。

中流家庭の生まれで、一人の妹がいる。

「あ、美香！ こっちこっち」

彼女を見付けた一人の女性が、明るく手を振る。それに応えて美香も手を振った。女性の名は川辺梓。カワベ アズサ

二人は同じ大学に通う女友達である。今日は、梓の新しいパーティ用ドレスを見立てるのに付き合っている美香。そんな彼女は、あまりデパートというものが好きでは無かった。

「ごめんね美香・・・やっぱりデパートなんか、来たくなかったよね」

少し表情が浮かない美香に、梓が申し訳なさそうに謝る。

「ううん、そんな事ないよ。それより梓、ドレスの希望はあるの？」  
彼女の従姉の結婚式に来ていくドレス。そういった方面にとんと疎いから、とお願いされて付き合っている買い物だが、美香自身、そういった類には詳しくない。

ただ、彼女の場合は恋人の兄の結婚式に出た事があるから、その

あたりで色々解る事があるだろうと、付き合っている次第だ。

「うーん・・・あんまり目立たないけど、地味じゃない、可愛いのがいいな」

随分とアバウトな答え。

それに苦笑すると、美香はとりあえず無難そうなドレスを一着手にとり、梓に示した。

「こういうのは？」

クリーム色の光沢がある記事で仕立てた、ワンピース形式のドレス。キラキラとしたジュエルに見えるビーズと、真珠に見立てた乳白色の輝くビーズが細かく縫い付けられ、それなりに可愛らしく凝ったデザイン。

「可愛い！ あ〜でもこれ、ちょっと裾が長いなあ。それに肩紐はあった方が良いかも」

「そう？ じゃあこっち」

次のドレスを手に取り、梓に見せてやる。

だが、そんな行動の裏、心に浮かぶのは・・・

『本日の最速ニュースです。今朝10時頃、××駅の駅前にあるデパートにて、謎の連続殺人犯の・・・』

一年半前の自分が聞いた、悪夢のようなニュース。

このデパートじゃない、この駅から6駅先の・・・ここより更に大きいデパートで起きた殺人事件。

その事件の被害者は軽傷者を含めて12人。そのうち、2人が死亡した。

そのうちの1人が・・・美香の恋人、藍川京汰だった。

「美香？ 美香？」

訝しげに、梓が自分の顔を覗き込んでいる事に気付き、美香は慌てて返事をした。

「えっ、な、何？」

「やっぱり・・・気にしてるんだね。ごめんね、ごめんね・・・」  
何を謝っているんだろう、この友人は。

そう思いながら、美香は相手の頭をぼんぼん、と叩いてやった。  
京汰がよく美香にやってくれた行為だ。

「こうすると落ち着くだろ？」と優しい声が簡単に蘇る。  
もう一年半経ったのに・・・本当に、自分は切り替えが遅くて困る。

「梓がどうして謝るの。京汰が殺された時、梓のカレシである翔君が一緒にいたからって、それは翔君の所為でも、ましてや梓の所為でもないよ」

優しく諭す様に言うと、ようやく梓は笑った。  
でも。

いちいち謝られる自分は、そのたびに心に灰色の何かが降り積もり、それが一日一日、凝固して重い岩になっていく・・・そんな感覚を味わうのだ。

そういう意味では、美香は梓と一緒にいるのが苦痛でもあった。

「お久しぶりね、木山さん」

梓と別れて場は一変、デパートからそのすぐ近くにある喫茶店へと移動した美香に、一人のいかにもキャリアウーマンと言った風体の女性が語りかけた。

彼女を見て、美香は立ち上がり頭を下げる。

「こちらこそ、お久しぶりです・・・倉岳さん」

「早速だけど・・・いいかしら」

少し申し訳なさそうに問う彼女に、美香は頷いた。

目の前にいる女性、倉岳美紗子クラタケ ミサコは、一年半前に美香のカレシが殺された時にその事件を担当した、キャリアを持つ女刑事。

女の人でキャリアを持つのは、珍しくもないが例が多いという訳でもないらしい。当時、彼女が己の任された大任に緊張しそして歓

喜していた事を、美香は忘れていない。

けれど一年半経つても、未だに犯人の名前どころか容貌の一切を捕まえていない今、彼女はキャリア組の頂点から転落、それでも過去の栄光にしがみ付いているのか、それとも何か他に理由があるのか・・・執拗に犯人を追い続けていた。

最早彼女の担当の事件の中に、あの殺人事件は含まれていないのに。

「構いませんけど、残念ながら・・・変わりはありませんよ」

苦笑しながら言うと、その答えを聞き慣れてしまった美紗子もまた、苦笑しながら頷いた。

「・・・でしょうね。だと思ったわ」

それでも、と一応日々の詳細を立ち入り過ぎない程度に訊くと、美紗子は席を立った。

「それじゃあ、何かあれば連絡ちょうだい。どんな些細な事でも良から」

にこ、と微笑して念を押すと、若き刑事は去っていく。

その後ろ姿を笑顔で見送ると、美香は瞳を閉じた。

「：刑事なんかには教えられる訳がないでしょう？ 京汰を殺した犯人が、誰かなんて」

冷たく、そう吐き捨てた。

「あなた達にアイツが捕まってしまったら、もう二度と、私は復讐出来ないんだから・・・」

そんな事は、許さない。

「たとえ死刑になったとしても・・・死刑執行されるのはずっと先。それに、たかが絞首刑になんの意味があるの？ あれだけの人を殺しておいて・・・京汰に、あれだけの苦しみを与えておいて・・・！」

ミルクティーの入られたガラスコップを握る美香の手に、これでもかと力が籠められる。それでも、ガラスは何の反応もせず、ただ平然とそこに在るだけ。強いて言えば、その表面にこびり付いて

いた透明な雫が、幾つかつうつと流れ落ちた。

非力な女の身では、渾身の力でもガラス一つ握りつぶせない。当然と言えば当然の事なのだが、それでもその皮肉じみたガラスの反応に、美香は失笑した。

ガラスから手を放すと、ゆっくりと鞆から携帯を取り出す。その薄く軽量のコンパクトさを重視した携帯もまた、今では少し古くなってしまった型だ。恋人とお揃いだった。携帯の型というのは、流行に合わせてどんどん形が変わっていく。

だが、それでも、この携帯が彼の死がいかに遠くなったのかを物語っていた。

そして・・・

美香は慣れた手つきで、それでもゆっくりと二つ折りの画面を開けた。そこには、愛しい彼とのツーショットの写真・・・ではなく、幼い頃に撮った「スリーショット」の写真が、ひどく荒れた様子で映っている。

撮ったのは彼女が中学生の時で、画像はそれを携帯に転送したものの。荒れていて当然だ。

だが、荒れようが何だろうが、映っている人物を確認出来ればそれで良かった。

一人は勿論美香。今よりも髪が短くて、セーラー服に身を包んでいる。今はコンタクトだが、この頃は眼鏡をかけていた。髪も当然、黒い。

一人は彼女の恋人だった藍川京汰。快活そうに笑う、それなりの美男子だ。だが、いかんせん体育会系で、この頃の美香はあまり京汰を好いていなかった。

その代わりに好きだったのが・・・

最後の一人の、カイトウ オボロ海堂隴。クラスの皆からは、どこか根暗そう、頭は良いけど性格が悪そう、などと言われていたが、美香と京汰、そしてこの隴は同じマンションの住人で、幼い頃からの親友だった。そして、クールで無口で無表情だが、ちゃんと優しさを持っている

て、頭が良くて暴力ばかり振るう男子とはどこか違った臙を、美香は好きだった。

でも。

「あなたが自殺しちゃってから、もう八年か・・・」

中学三年生の半ば。難関高校への進学も保証され、既に一流への道さえ拓いてしまいそうだった彼は、突然の自殺を図った。

近所にあつた放水所に飛び込み、後には大量の赤くそまつた水溜まりと、彼の鞆、そして革靴が残されていた。

あの時は目の前が真っ暗になったかと思つた。

そんな美香を支えてくれたのが京汰で、それから美香は京汰を好きになつていった。

だから、こんなメールは気にしなくて良かったのに・・・

そうすれば、現実を知らずに済んだのに・・・

「今日久しぶりに海堂に会つたんだ。何年ぶりだろうな？」

このメールの意味が解らない程、自分が馬鹿なら良かったのに。

自殺した人間が生きていただけでも大問題だ。それなのに。その現実を京汰は不思議がつていない。否。不思議がる暇さえ、無かつたんだ。

誰にも解らないように、それでも美香にだけは危険を伝えられるように。

自分を殺したのは、海堂臙、その人だと。

たとえ犯人の名前が解つていても、それは八年前に自殺した人物。どう面影が変化しているかなんて解りっこないし、どこ

に住んでいるのかもさっぱり解らない。

それでも、指紋を消す方法だとか、足のつきにくい凶器だとか、  
そういった物について調べ、収集するくらいの事はやってきた。

だが、肝心の犯人については、何一つ進展がないままだった。

この日まででは。

## Diary 1・悪魔と再会した日【中】

繁華街の外れには、それなりに洒落た店も存在する。だが、その中心へと入れば、極端に華美な店や、それに似合った格好の女性など、美香にとっては不快なものばかり。

美香は、一切の化粧をしない。

彼女が毎朝己の顔に施すメイクと言ったら、肌を整える為のオイルとクリーム、コンタクト（これはメイクとは言えないが）、そして唇に塗る色付きの保湿クリームだけだ。

それが、けじめだと思っていた。

周りにはそれを聞いて引くものもいたし、それだけカレシを愛していたのだと涙ぐむ者もいた。

付けるアクセサリーも、宝石のついた物は一切ない。

ジュエルの可愛いネックレス、特にこれは京汰が死んだあと、すぐに処分した。自分にはそんなものを着ける資格などないのだ。

今引出に残っているアクセサリーは、銀で出来たクロスが殆ど。

クリスマスではないが、それでもクロスを選ぶ事が多かった。

それでも一つ、宝石がついたアクセサリーの中で、捨てられない物もあった。

指輪だ。

彼女にとって、京汰との恋が始まった頃、他人に誇れるものといったら手くらいだった。顔立ちは際立つて美人という訳じゃなし、あの頃は今よりも背が低かった（成長期が極端に遅かったのだ。それは男子並みに）。

だが、手の形だけは誰にも自慢出来た。自分で言うのも何だが、本当に綺麗な形をしていたのだ。手だけは。

だから、京汰がアクセサリーなら何が欲しい、と訊けば、必ず指輪と答えていた。おかげで、京汰からのプレゼントの半分は、指輪が占めている気がする。

ふと、一つの宝石店に目がいった。

こういう所で見えるアクセサリーというのは、本当に美しい。まあ、商売の為にもそこらへんは力を入れているだろうが。

少し探る様に店内を見詰めて、しばし、立ち止まってしまふ。何歳の子供かと思ってしまうが、実際立ち止まって店内を眺めてしまつた。

そんな私に、語りかける人があつた。

「み、か・・・？」

茫然とした様な声。

下の名前を呼ぶ程、親しい人は誰だろうと声のした方へ振り向いた瞬間。

美香の目が、極限まで瞪られた。

襟足の短い、艶やかで真つ直ぐな黒髪。切れ長で、いかにも出来る人といったイメージを抱かせる黒檀の瞳。女みたいに白い肌。

少し大きめのブルーグレーのパーカーを羽織り、その下に真つ黒なタイトルを着ている。耳にはシルバーの幅広のピアス。首から下げて胸の少し下で揺れるのは、美香とはデザインの違う銀色のクロスだつた。

「やっぱり、美香だ」

ふ、と優しく笑んできた相手に、美香は暫く反応も出来なかつた。

「朧・・・」

だつてまさか、自分を殺した相手の恋人に、親しげに挨拶出来る人なんて、いるとは思わなかつたから。

こんなに優しい笑顔を、自分が大好きで大好きで仕方なかつた、滅多に見られない笑顔を、あっさりと向けられるとは思わなかつたから。

「久しぶり。これから時間、ある？」

彼は思いもしないのだろつ。

自分がこんなにも驚愕しているのは、自殺した筈の彼が生きていた事に対してではなく、仇を打つチャンスがこんなにも早く訪れる

とは思っていなかったから、だとは。

「ゆつくり話したいんだ。八年前の事とかも……」  
ほら、やっぱり。

「駄目かな？」

少し寂しそうにさえ見える表情で、臙が問う。

やめて、やめて。

決心さえ鈍りそうになる、優しい微笑。誰が見ても、ここにいる彼が、凶悪な殺人犯だとは思えない、清純な表情の数々。

今更になつて、今まで胸の奥底に閉じ込めてきた疑問が溢れだした。

どうして、あなたが死んだから好きになつた人を、あなたが殺すの、と。

あなたが死ななければ、こんな悲劇は起こらなかったのに……胸の内ではそんな悲痛な叫びを上げながら、美香はそんな感情とは裏腹の、美しい笑みをその貌に刷いた。

「いいえ。時間はたつぷりあるわ。聞かせて……あなたの話」

その身に纏う雰囲気、もう少し明るくさえあれば、彼は「綺麗」と言われる方面のイケメンと、周りにもてはやされただろう。

そんな少し弱々しささえ感じさせる美形になつた臙に、美香は小さく息を吐き出した。

本当に、何も変わっていない。

体育会系とは真逆の勉強方面一直線だった頃の彼と。少しばかりチャラくなつた気もしなくは無いが、それでも本質が変わっていない。

何より、何人もの人を殺した凶悪な殺人犯……「21世紀の切り裂きジャック」なんてあだ名まで付けられる人が、こんなに美しくて穏やかだとは、誰も思わないだろう。ベタな命名だけでも。

臙の犯行は無差別で、警察も手の打ち様が無かつた。被害者は老若男女問わず、殺される場所も東西南北関係が無い。

そして何より、その行動はあまりに大胆だった。道行く人がいる

中でも、平気で人にナイフを振りかざすジャック・ザ・リップー。その理由は簡単だ。

顔がバレたって良かったのだ。

だって彼は、既にこの世に存在していないとされる人物。血眼になって警察がその素性を探ろうとも、過去の記録を塗り替えられない限りそれは不可能な事。

「どうしたの？ 美香。黙り込んで・・・」

気遣わしげに臙が問う。その顔は実に無表情に近いが、彼が優しい気持ちでそれを言っているのは、幼馴染だったから判る。

「別に黙り込んでなんかいないよ」

答える声に憎しみが滲み出ない様に、と細心の注意を払う。けれど、そう苦勞せず穏やかな声は口から滑り出た。

「そう？ なら良いんだけど。昔はもつと、口を閉じる暇もなく色々と話していたから」

昔の事を語られると、ぎゅっと心臓を鷲掴みにされた様な気分になる。

やっぱりこの人は海堂臙なんだと。

本当は、今すぐにも裏路地に連れ込んで胸倉を掴み上げて、京汰を殺した理由は問い詰めたかった。他の誰を殺しても良い、どうして幼馴染を、一番の親友を殺したのか、と。

「ねえ臙。今まで一体何処にいたの？ 何で、生きてるの・・・？」

呟く様に問うと、臙は困った様な笑みを浮かべた。

「元々僕は、あそこで死ぬつもりなんか無かったんだよ」

予想すらしていなかった答えに、美香は目を瞠る。

「死ぬつもりは・・・なかった？ でも、自分で飛び込んだんでしょ？」

「違う」

即座の否定。

臙の目が真剣なのを見て取って、美香は戸惑った。

「僕はね、あそこで生まれ変わるつもりだったんだ。『海堂臙』の

全てを、リセットする為に、ね」

意味が解らない。彼が言わんとしている事が全く解らず、美香は首を傾げて応えた。

いつの間にか辿り着いて上っていた歩道橋の縁に肘を付き、隴は道路を眺めた。下をそれなりのスピードで走って行く車と隴が、頭の中で放水所の激流を眺めていただろう幼い彼とダブった。

「生まれ変わる？」

「世間体としては、確かに死ぬつもりだったかも知れない。僕は自殺した人間になりたかったから」

「・・・？」

「うんざりしてたんだ。毎日に。だから、自殺して、親無し、一文無し、親戚すらいらない只の『隴』になって、もう一度全てをやり直したかった」

理論上では、これで過去の隴の行動は理解出来た。

それでも、心は理解出来なかった。全く解らない。意味不明だ。けれど・・・「意味不明」だからこそ、彼は殺人犯なのだろうと頭のどこかは漠然と考えていた。

「ねえ美香。良ければウチに、来る？」

そんな矢先に、隴は自らの命を美香に捧げてしまふ言葉を、紡いだ。

隴が住んでいる場所は、美香の家からもそう遠くないマンションだった。

死んだ筈の人間がセキユリテイもある程度ちゃんとしている家に住めるとは、日本は結構危険な国だったのだな、と漠然と考えた。

「いらっしやい。散らかってるけどね」

社交辞令というか何というか、誰もが言う台詞を吐きながら家に招き入れた隴に、美香は冷めた気持ちになった。

本当に、馬鹿な男。

柔和な笑みを浮かべているからか、余計にこれから自分に殺される事が馬鹿らしく思えてくる。

そう・・・殺す。

今まであんなに犯罪者らしい思考で、指紋などの証拠が見つからない為の手段を探していたというのに、いざ彼に会ってしまったと、彼を殺して捕まるのも良いかと思えてきた。

人を殺して何も罰を受けないという方がおかしいのだ。

そう思えば、気が楽になった。

「全然散らかつてなんかないよ」

にこりと微笑して言う。

嘘を吐かれるのはとても傷つく。けれど、吐くのはとても簡単だ。

こんなにも卑劣で醜い嘘を、自分は簡単に口に行っている。いや、

言葉に嘘はないのだから、嘘をついているのは表情か。

「そう？ 待つてて、今お茶でも淹れるから」

そう言いながら、パーカーを脱いだ臙がキツチンと思われる場所へと消えていく。美香はどうしたら良いか解らず、とりあえずその場に立ち尽くした。

すぐに臙は台所から出てきて、くすりと笑った。

「どうぞ、座って。今お湯、沸かしてるから」

手で促され、美香は大人しくソファに座った。本当に、良い暮らしをしている。

「こんなに贅沢なのが信じられない、って表情だね」

全てを見透かした様に臙が微笑む。

「・・・ちよっとね。どうやって入居したの？」

「それは言えない。プライベートルットって事にしておいて」

それだけで、少なからず「裏」の世界が関与している事が解る。

殺人者ともなると、それなりの「繋がり」はあって当然だ。

「そっか。そうね、誰にも触れられない部分ってあるものね」

口ではまた、さらさらと偽りの言葉が流れ出て行く。

どんどん自分の大切なモノが抜けていくみたいで、美香は背筋が寒くなってくる様な錯覚を覚えた。

## Diary 1・悪魔と再会した日【下】

ピッ

突然、湯が沸騰した事を告げるヤカンの笛が鳴り響いた。

「あ、沸いたみたいだね」

緩慢とした動作で、臙がソファから立ち上がる。ゆっくりと台所に彼が入ると、しばらくして優しい紅茶の香りが漂う。

美香の好きな、アールグレイの香り。

「はい、お待たせしました」

目の前に置かれた紅茶が、ホットにしては微温めでミルクと蜂蜜が入っているのを見て、美香は目を閉じた。

「・・・こんな事まで覚えてたの？」

完全に自分の好みに合った紅茶。

不器用だった京汰には、決して出来ない真似だ。何より、自分の紅茶の好みを完璧に知っているのは臙だけだった。

幼い頃にピタリと彼に好みを当てられ、それ以来、他人に当てられない限りは好みを明かさないできた。その所為で、今や彼を覗いて美香の好みを詳細まで知る人物は、一人もいないけれど。

「ん？ ああ、美香のホットの紅茶に対する細かいこだわり？」

くす、と微笑して臙は「当たり前だよ」と言った。

「そりゃあ、僕と全く同じなんだから。覚えているよ」

そう言つて、自分のカップを・・・美香のカップと全く同じ色をした濃いクリーム色の液体を見せた。

「・・・そう。そうね」

頷き、一口飲んでから美香は少し違和感を覚えた。

あまり甘くなかったのだ。

「えっと、臙。これ・・・蜂蜜がちゃんと混ぜてないんだけど」

「あれ、ごめん。スプーン持つてくるよ」

わざとではないらしい反応に、美香は首を振った。

「いいわ、自分で取ってくる」

「・・・スプーンは食器棚の上から四段目の引き出しにあるよ」  
立ち上がった美香を、朧が視線で追う。

そんな事をされると、彼女としては心の内を見透かされているのではと気が気でなくなるのだが、朧は美香を止めはしなかった。

そして美香は、台所に入った。

手に取ったのはスプーンではなく・・・食器洗い機の傍にあった、一本の果物包丁。

それに指先が触れた瞬間、ばらばらとパズルの破片が崩れてゆくように、何かが音を立てて己の動きを止めるのを、美香は認識した。特に急いでいる行動でもない。

その安心感からか、台所で包丁を手に硬直するという、実に奇妙な行動を取らねばならなくなってしまった。

「美香？」

向こうから朧の怪訝そうな声が響く。

何も物音がしないことに違和感を覚えたのだろう。

「どうかした？ 棚の場所、解らない？」

穏やかな声が問う。

「べ、別に。ちゃんと解る」

そう言って、何故かあわてて包丁から手を離してしまう。その行動に、美香は自身の決心が解けかけているのかも知れない、と信じたくない現実気づいた。

「まさか・・・」

思わず呟いてしまった。

「どうかした？」

朧がソファから立ち上がる音がする。まだスプーンさえて手に持っていない事態に、美香ははっとした。ガタンと音を立て、棚を開ける。

簡単に見つけられたスプーンを手に、朧とはち合わせになる形でキッチンから退出する。

「うわ、どうしたの、そんなに慌てて」

まるで彼の胸に飛び込むみたいな姿勢。それに、美香の顔が熱くなつた。

「なんつ何でも無いの！ 本当に・・・」

訳が解らなかつた。

つい数秒前まではあんなに冷たい気持ちで、目の前の男を殺してやろうと凶器まで手に取つたのに。今は、まるで片恋人との会話の様に、赤面しながら微笑ましいとも言える駆け引きをしている。

「本当に、大丈夫・・・？ 美香」

ミカ。

自分の名前を呼ぶその声が喪われるのを、恐れる自分がいるのかも知れない・・・

「大丈夫じゃ、ない」

「え？」

「全然、大丈夫じゃ・・・ない・・・っ！」  
ぱたり、と。

透明な雫が、心配そうに美香の肩に手をかけた臃の腕に落ちた。

「美香っ？」

驚愕の表情で、臃が顔を覗き込んでくる。それでも、彼女の瞳から涙は止まらず溢れてくる。

哀しかった。無性に、心が悲鳴を上げていた。

殺さなきゃいけない。でも、殺したくない。

この男との時間が楽しい。久しぶりに、心が安らぎを取り戻せた時間だつたから。

「何で・・・こんな事になつちゃうの・・・」

泣き続ける美香に、臃が戸惑いながらも口を開いた。

「もしかして、京汰の事？」

「・・・え」

誰が聞いても自分が殺した相手とは解らない様な言い方で、臃は京汰の名を紡ぐ。

「京汰の事を、思い出したの？」

「……うん、そう」

心が、また黒く傾きかける。

誰か、この不安定な心を黒一色に染める方法を、教えて。

美香は切に、願った。

目の前の純粹な黒の悪魔を、黒だけだから美しく見えてしまう悪魔を殺すのは、こんな疎らな色では……不可能だから。

## 間

カチ、カチ・・・と、規則的な時計の針の音に、隴は耳を澄ませている。

カーテンが未だに閉められていない部屋は、蛍光灯の仄暗い明りだけに包まれて、幻想的とも言える妖しい色に覆われている。

窓から差し込むのは、都会の不純物だらけの空気に邪魔されながら僅かに届く月の光。外は、星の光さえぼやけて美しいとはとても言えない、淀んだ雲の浮かぶ夜空だけが広がっていた。

ソファに沈み、名目して身動き一つしなかった彼の瞳が、不意に開かれる。

現れたその双眸を、もしも過去の彼を知る人が見たら驚愕しただろう。

僅かに濡れた鴉羽の色。そこにあるのは虚無。

「今日は随分と機嫌が良い様だな」

何の前触れもなくかけられた声に、隴はただ嘆息した。

「何度、他人の部屋に勝手に入るなど言ったら解ってくれるのかな」

「君は」

「そう怒るなよ」

「勝手にこの部屋に入って、誰かと鉢合わせしても知らないよ？」

隴の忠告に、相手は意外そうに鼻を鳴らした。

「そんな事を言ってお前が自宅に招く相手なんか居ないだろ」

「・・・今日は美香が来てた」

反論じみた言い方で、隴は一人の少女の名前を出す。それに、相手は一瞬動きを止めた。確認する様に問う。

「それは、木山美香の事か？ 一体どうして」

信じられないとばかりに瞠目する相手。そんな相手の反応に隴は満足げに唇を吊り上げた。

「あげないよ？」

「・・・は？」

「あげないって言ったの。美香は、君なんかには渡しとあげないよ」  
くすくすと笑う音が響く。

朧が一番楽しそうに笑う時が、この笑い方だ。それを知っている相手は、怪訝そうに眉を顰めた。こんなに興奮した朧は、ここ最近では初めて見る。

「これはまた、とんでもなく入れ込んだものだな」

「・・・当たり前」

冷やかしを籠めて言った言葉にさえ、即答される。惚気か、と相手は朧の頭を小突きたくなった。だが、その考えは朧の眼差しで中断を余儀なくされてしまった。

「僕は君みたいに、沢山の人を愛する事なんて出来ないからね・・・僕がこの手に入れるのは、美香一人で充分」

鮮やかに微笑む。だが、その言葉の真意が解らず、相手はただ首を傾げた。そして、思った事を口にした。

「その『手に入れる』ってのは、殺す事か・・・？ お前の過去をよく知る人間を、残らず始末する為に」

その回答に対する応えは、いつまで経っても無かった。

## Diary 2・悪魔の恋情【上】

「ねえ美香。美香は今、理系の大学に行ってるんでしょ？ どうして？」

朧と再会してから三日。

美香はまた、彼の部屋にいた。

「どうしてって…どうして？」

「だって、美香って昔は文系だったじゃない。それに京太は体育会系だったし」

くすくすと笑う朧は、相変わらず殺人鬼には見えない。

そう、美香たち三人は本当にバラバラだった。

「理系だったのは朧だったわね」

「…そう。だから、何でかなって思ってた」

そう訊きながら、朧が私のすぐ隣に腰かけてくる。そしてその艶めかしい雰囲気と纏わせた表情で、美香を覗き込んだ。

「答えてよ、美香。いつから、ううん…どうして理系になったの？」

「かつと、一気に顔が熱く赤くなったのが解った。」

「すぐさま顔を背けた美香に、また朧が笑いを零す。」

「何となく？」

そして逃げ道まで掲示してくる。いつもこうだった。

美香が理系になった理由。理系の大学を選んだ理由。それは、「朧が理系だったから」。今思ってみれば、彼女の行動パターンは本当に単純だった。

すべて、朧に繋がっているのだ。

そしてそれを見透かした様な質問を、朧は毎日浴びせてくる。毎日美香を部屋に招き入れて。

「うん…何となく」

「そっか」

ほんの少し触れるシャツ越しの体温が、何故か美香を安心させた。

恋人の様に寄り添っている訳ではないから、ぴたりと伝わる温かさではない。それに安心するならまだしも、美香は切なくなってしまうのだ。

その体温の遠さが、彼とは永遠に分かり合えない証の様な気がして。

「…ねえ臃。臃って、好きな子とかいた？」

「どうしたの直前」

打てば響く様に、臃は美香の質問にすぐに答える。

美香はその真逆だった。いつも、答えは臃に導いてもらわなければならぬ。そして結局、嘘偽りの答えしか言えない。

「そうだね…いたよ。ううん、今も。可愛くて純粹で、本当に綺麗な女の子」

「……そう」

その答えを聞いた時、不意に美香の中に黒い感情が戻った。

この三日間忘れていた、どす黒く重い感情。

「その子が、今も、その…好きなの？」

「うん。大好き。この世で一番」

すぐに返ってくる答えに、淀みはない。恐る恐る彼の顔を見ると、蕩ける様な表情を浮かべていた。

それに、美香の中で何かが音を立てた。

「そうなんだ」

何を考えるでもなく口から漏れ出た言葉。その虚ろな響きに、臃が怪訝そうな表情を浮かべる。

「美香、どうかしたの？ ああ、もしかしてその相手が気になるのか？」

面白がる様に訊いてくる。

そうよ、その通り。その相手が誰なのか気になってたまらないの。あなたみたいなの冷酷で血も涙もない殺人鬼が、昔も今も想っている女がどんな奴なのか、知りたいの。

そう叫んでやれたらどんなに楽だっただろう。けれど、彼の正体

を認める事は怖くて出来ない。もう少し、もう少しだけ只の海堂朧を見ていたい……

だから一つ、賭けをしよう。そう考え、口を開く。

「ねえ朧：真面目に答えて？」

「僕は美香の質問にふざけた回答をした事、ないよ？」

「良いから。朧は、京汰の事、好きだった？ 嫌いだった？」

朧の瞳が、ゆっくりと見開かれる。

光を多く取り込んだ瞳が、漆黒から深い藍色になるのが見えた。

艶めかしい美貌を驚きに染めて、神秘的な瞳が真っ直ぐに己の双眸を射抜く。

静寂はほんの数秒。けれど、美香にとっては永遠に等しい無音の空間だった。

やがて、薄い唇が吊り上げられる。見た事がない程、挑戦的な笑みが目の前にあった。少なくとも「海堂朧」が浮かべる事のない、凄絶で不敵な微笑。嗤笑にも見える表情は、今まで美香が見て来たどんな笑顔よりも、魅力的で畏怖を感じるものだった。

頭の奥で何かが警鐘を鳴らす程に、恐ろしい微笑み。けれど、美香はその答えを聞き逃す訳にはいかなかった。

「嫌いだったよ。死ぬ程」

耳を、疑った。

そして同時に、己が賭けに敗れた事を知った。

美香は自他共に認める程に、保守的な性格だ。最初から、自分が負ける賭けなどする性質ではない。つまり、己が負ける賭けだとは思っていないかったものに、負けたのだ。

もしも朧が京汰を「好き」だと言えば、きっと長年想ってきた誰かを手にかける事有り得るのだろう。そうすれば、自分はきつと、このどす黒い感情を抑える事が出来る。

そう思っていたのだ。

そしてその考えを肯定する事が出来るくらいには、朧と京汰は仲が良かった……筈だった。

けれども彼の答えは「嫌い」だった。それはすなわち、好きな者を手にかける事はしないという事・・・本当の意味で、その誰かを愛しているという事。

認めざるを得ない。

賭けに負けた事を思えば、それはあっさりと受け入れられる事実になった。

そう、美香が臃を好きだという事は。

「最悪・・・」

仮にも自分の恋人を殺した相手、しかも恋人を「死ぬ程嫌い」と称した人間を、自分以外を愛している事に憎しみを覚える程、想ってしまうなんて。

それに。

京汰と臃と美香は、皆同じくらいに仲の良い幼馴染だった。そう、思い込んでいた。それすなわち、臃は美香の事もまた・・・

「やられる前に、やるしかない、かあ・・・」

溜息と共に、美香はそう呟いた。

## Diary 2・悪魔の恋情【下】

眩きは本当に小さいもので、臙は何も聞こえなかったのだろう。そのまま、沈黙が流れ続けた。

「ごめん臙。ちょっと、台所借りるね。お茶、飲みたくなっちゃった」

無理矢理笑顔を作つて言うと、彼は以前と同じく快く頷いた。

「僕が淹れても良いんだけど…自分で淹れたい、のかな」

相変わらず、美香の心をよく解っている。

うん、と明るく肯定して、キッチンへ入る。そこには、前と変わらない場所にそのまま、果物包丁が置いてあった。まさか家事をしていないのだろうか、と疑いたくなる程、それは変わらぬ場所にある。

そつと手に取ると、包丁にしては小ぶり故、あまり重くない柄が冷たく感じられた。だが、この前手に取った時の様な、得体の知れない虚脱感は生まれなかった。

大丈夫、やれる。

心の中で自分に言い聞かせ、美香はそれを後ろ手にそつと臙に近寄った。

火を点けた音がしない事に違和感を覚えたのだろう、彼は訝しげに座つたまま振り返った。

「やかんの場所、判らなかつた？」

「ううん。大丈夫」

「…そう」

笑顔で強引に納得させると、臙は大人しく視線を元に戻す。背後から襲うなんて卑怯な真似、本当はしたくなかった。だが…いくら細身と言つても臙は男。男女の力量差は無視する訳にはいかないのだ。

ゆっくり、なるべく足音を潜めながらも、完全には消さずに近付

く。さりげなさを出す為に。殺意を感じ取られぬ為に。そして。

「……さよなら」

小さく小さく。

自分でもちゃんと声に出来たか判らないくらいの小さな声で、美香は別れを告げた。臃が振り返る様子は無い。さよならと共に振り上げられた刃が、かなりのスピードで、しかし美香の目には極度に緩やかに、臃の首筋へ近づいていった。

「っ！！」

手応えが、あった。

ぴしゃ、と嫌な水音が響く。両手で握った柄を伝って、生温かいモノが手に触れた。

気持ち悪くてどうしようもなく、急いで手を放そうと思うのに、緊張と恐怖でかじかんだ手がそれを許さない。

ぎゅっと閉じた瞼を、恐る恐る開いた。

きつと目の前には、赤に染まった地獄があるだろう。

「…本当に君は、可愛いね…美香」

穏やかな声が、血に染まっている筈の部屋から聞こえた。

「な、ん…で」

果物包丁は、確かに臃の血に濡れていた。しかし、その刃が貫いたのは致命傷を与えられる首ではなく…。

「僕が何者なのか知ってるなら、尚更この行動は可愛げがあると思っよ…？ 殺人鬼、それも切り裂きジャックなんてふざけた名前で呼ばれてる相手に、刃物で対抗しようなんて、ね」

右掌に包丁を食い込ませ、そこから紅い雫を滴らせながら、美しい切り裂き魔は笑った。

その瞳に、明らかな愛情の光を宿らせて。

茫然とする美香に、ゆつくりと汚れていない左手が近づく。そっとなりに添えられた手の冷たさに、彼女はびくりと震えた。そんな美香を宥める様に穏やかに微笑むと、臃は右手を引いて小さな身体を

引き寄せた。

唇に、冷たい何かが触れた。

「……!?!」

突然の事に反応が遅れた美香が、双眸を極限まで見開く。そして、一瞬後には身を放していた臍を食い入る様に見詰めた。

「話を最後まで聞かずに暴走するところとかも、変わらないね…僕が好きなのは、君だよ？ 美香。僕を殺したくてその事で頭を一杯にしてる君を、僕は愛してる」

喜びも哀しみも、湧かなかった。

ただ美香は、乾いた笑いを、心の中だけで零していた。

## 間

からからと、氷がグラスに当たる涼やかな音が響く。

メープル色のウィスキーが入ったグラスに目をやった人物が、嘆息した。

「お前、またそんな濃いのを飲んでるのかよ……」

「…悪かったわね、酒臭い女で」

呆れた様な声に返された声音が、いつもに増して陰鬱なものだと気付いた人物は、グラスを手の中で弄ぶ美香の隣に、無造作に腰かけた。

彼にとってみれば、美香は自分の彼女の友人。しかも唯一無二の親友ときている。何か事情がありそうな雰囲気ならば、放っておく事は出来なかった。

彼女である梓曰く、「いつも化粧も殆どしないから解り辛いけど、絶対化ける可能性大」という美香の顔には、今まで見た事もない様な暗い表情が浮かんでいた。

否、一度だけ見た事がある。

(京汰が死んだ時も、こんな顔してたよな……)

死んでしまった友人の名を思い出し、彼は少しの胸の痛みを感じた。

彼の名は鈴村翔<sup>ススムラ カケル</sup>。

「酒臭いとまでは言っておねえだろ、オイ。ただ、女がこんな時間からそんなえげつねえ色したウイスキー飲むなって言ってるんだよ。つかそれホントに水で割ったのかよ」

美しい夜景が広がる窓辺に背を向ける美香は、カウンターに両肘を立てていた。

彼女の目の前にはウイスキーのボトルと、一度沸騰させて空気を抜いた水で作った、透明な氷の山。そして水。

なのに、美香のグラスの中のウイスキーは、有り得ない色を呈していた。

「カルピスの原液飲むガキと同じじゃねえか」

はああ、と大仰に溜息を吐くと、翔はバーテンダーに目にも鮮やかな気に入りのカクテルを頼む。

「で？いきなり呼び出して何の用なんだよ」

「見つけたの」

「はあ？何を」

「京汰の仇」

「……………何だつて？」

実に面倒くさそうに対応していた翔の声が、鋭さを帯びる。

迫る様な体勢になって、翔は美香の顔を覗き込んだ。彼女の瞳に虚偽の影がないか必死に探っている。

その切迫した態度に、美香はくすりと笑った。今までの彼女からでは考えられない、どこか蠢惑に満ちた微笑。

「こんな事でアンタに嘘言ってるのよ。本当の話よ、本当の

話

「冗談だろ……」

口ではそう言いつつも、翔の目は美香の言う事を信じていた。

美香は、言っているいい冗談と悪い冗談の区別くらい、きちんと付いている。そもそも、彼氏が殺されてからは一切の嘘や冗談を言わなかったのだ。

それなのに、いきなりこんなへビーな嘘を言う筈がない。

「お前が、アイツの仇を探してるのは知ってた……散々梓が心配してたからな……でもまさか、警察にも捕まえられない切り裂き魔を、見付けたなんて……そんな」

店員から差し出された、美しいブルーのカクテル。それに見向きもせず、翔はウィスキーを飲みほした美香を見詰めた。

「それで、お前は一体……何をしようってんだよ。まさか、復讐するとか言わないよな」

恐る恐る、翔は訊いた。

まるで、答えは聞きたくないと言うかの如く。

「さあ？ どうだと思っ？」

シャンデリアに照らされた美香の顔が、この時の翔にはとてつもなく美しく見えた。まるで、天使の仮面を被ったおぞましい悪魔の様に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2576r/>

---

Fromミカ

2011年9月7日03時10分発行